

臓器提供に伴う法的脳死判定のための脳波検査に対する検査室の取り組み

◎吉井 睦美¹⁾、曾根 早矢佳¹⁾、屋良 朝仁¹⁾、松尾 理恵¹⁾、長島 恵子¹⁾、北沢 敏男¹⁾
国立研究開発法人 国立国際医療研究センター病院¹⁾

【はじめに】当院は病床数約 700 床からなる国立高度専門医療研究センターの一つであり、診療と研究を統合した高度医療を提供する特定機能病院である。3 次救急受け入れ病院でもあり、臓器提供を行うこともあるが、ここ数年は事例が発生していない状況である。また人事異動に伴い、経験者が不在となったため、臓器提供に伴う法的脳死判定のための脳波検査に対し、体制構築を行うこととした。

【取り組み】①法的脳死判定チームの結成：事例発生時に人員配置に困らないように、チームを結成した。②マニュアルの再作成：過去の事例発生時に使用したマニュアルが、不明確だったこと、また機器等の変更による修正が必要であり、見直し・再作成を行った。③機器や物品の整備：検査に用いる機器のメンテナンス実施や、物品の補充を行った。④法的脳死判定チーム要員の教育：マニュアルの読み合わせや日本臓器移植ネットワーク（JOT）の HP 内の動画視聴など活用し、脳死判定に対する知識の習得を行った。⑤シミュレーションの実施：院内移植コーディネート委員会に協力依頼し、外部講師を招いての実技トレーニングを

兼ねたシミュレーションを行った。

【結果】上記の取り組みを行い、事例発生時には法的脳死判定チームから教育を受けた技師が、マニュアルを用いて脳波検査を実施する体制構築を整えることができた。また、院内移植コーディネート委員会に協力依頼したことで、多職種の方々に脳波検査手順や検査時の注意点など情報共有することができた。

【考察・結語】検査室内だけでなく、多職種の方々と意見交換できたことは、大きな成果であった。しかしながら事例未経験のため、実際の事例発生時の不安は回避できないのが現状である。円滑で正確な検査を行うことができるよう、今後も情報収集やチーム内の教育・シミュレーションの実施を定期的に行うことが重要であると考えられる。

【謝辞】シミュレーションを行う機会を与えてくださった移植コーディネート委員会の方々、外部講師として講義や手技を教えてくださいました藤田医科大学病院の吉川充史先生と篠原香月先生に心より御礼申し上げます。

03-3202-7181（5266）